

## 阪田泰二

ある会合の帰り途、阪田さんは私に「明日、俺の分が発令になるよ」と言う。「何かい、国税長官にかい」と聞きただすと、「うん、税金とりなどこりこりだよ」と重ねて言うので、私は「税金をとるのが好きな人に長官になってもらっては迷惑だよ、それでいいんだよ」と返答して、四谷の街角で右と左に別れた。

自分の仕事について、他人に感想を求められたりすると、日本人は往々それが極めてつまらぬ仕事のように言うのが、その仕事に内心多少の誇りをもっている、エチケツトのように思っている。ところが、阪田さんが「税金とりなど、もうこりこりだ」と言われると、その言葉尻には何の誇張も留保も響かない。そのとおり受け取っていい人柄である。

彼と私は、私が大蔵省入りをした時からの交際で、どちらかと言えば縁が深かった方だ。その彼から、私は自分の受持つ仕事に対する感激とか誇りとか、あるいは執着めいた事を一度も聞いたことがない。ないばかりか彼は自分の仕事に対して一向に感激を覚えなないという態度で終始している。私は今でも彼のメンタリテイはそういう不感症に罹っていると思ひ込んでゐる。

仕事に対する感激性が乏しいたちでありながら、仕事のはこび方は実に速い。分析力は人の数倍ももち併せていながら決断も実に速い。淡々として流れる水のように迎えては片付ける。そしてその結果について思い悩んだり、人の思惑を気にしたりする所が微塵も見えない。

由来、日本の行政官というものは明治憲法や後進資本主義を温床として、行政官でありながら半ば政治家に仕立て上げられたものである。従つて日本の役人気質の中には、自分の責任と実力について政治家的な評価を加え、世間の反響や思惑に相当敏感な人が事実いた。そのために行政の仕事が役人の主観によつて促進されたり、あるいは偏向や渋滞を招いたことがなかつたとは言えない。

阪田さんの場合は、そういう気持がちつとも見られない。ただ淡々と仕事を流れ作業のようにさばいて行く。そして自分の成し遂げた仕事に対する他人の評価に、気を揉むようなこともない。いわば最も能率的な行政官、文字通りの能吏である。

といつて彼はその時々々の政治のあり方に無関心であるわけではない。といつて政治におもねる等ということは棄にしたくもない人である。殊に政治家などという人種には尊敬の念を覚えなければかりか、どちらかといえば、小馬鹿にし厄介者としか考えていないらしい。そして腹の中でそう思っているばかりでなく公然と悪口を言う。時の大臣が誰であつても、齒に衣をきせず吐き

出すように大臣のやり口を批判もする。しかもその批判が極めて公明であり、感情でことさらに歪曲しているという印象をうけない。またそのために嫌な仕事を意地悪く停滞させたりなどはない。口と腹、言葉と行動との間に介在するものが何も無いというサツパリした気性である。真に男らしく勇気のある人というのは、彼のような人物をいうのだろう。

二十三歳で、どこかの税務署長をやったという秀才街道の最も近道をばく進して来た阪田さんが、上におもねることもなく、下にこびることもなく、淡々と流れる水のように、大蔵省の各部局を渡り歩いて、行くところとして、可ならざる事績を残して、今度は彼が最もいやがる国税庁長官まで辿りついたのである。彼には文字通り、何の感懐も覚えないうらう。

昨日のように今日も又彼は自分に与えられた仕事を、淡々とこたわりなく能率的にさばいて行くことであろう。仮に私が、「阪田長官と日本の税務行政」というようなことについて、つい思いついたことなど書き記すと、彼の憫笑を買うに過ぎないことを私はよく知っているから、私の筆は重くて運びそうもない。

行雲流水の彼の行政脚は、何等の銜気げんきもなく、明日もまた昨日のように続けられて行くことであろう。(昭三〇・七)